

## 第12章 ポリビオス再論：

1900年のヨーロッパで「近代 modern era」と言えば、それはコラ・ディ・リエンツォ Cola di Rienzo がローマ市の「護民官 tribune」に任ぜられた1347年とか(16)、ボッカッチョが『デカメロン』の執筆を開始した1348年に始まるということに成っていた。例えばフリーデルの『近代史』がそうである(17)。これでは、フランス革命がナポレオン3世から始まるとうようなものである。中世を「暗黒 dark」と考えていた歴史家が、14世紀に使われるようになった近代的な言葉に注目した結果がこれであった。

しかし1347年とか1348年を近代の始まりだとすると、本当の意味での近代と、外見だけが近代的で中身は近代でも何でも無い時代との違いが判らなくなってしまう。つまり「第2の教皇革命」が何であったかが判らなくなってしまうのである。13世紀(Ducento)の「鞭打ち行列」は本物であった。しかしボッカッチョの時代の「鞭打ち行列」は戯画に過ぎないのである。

ここで「第2の教皇革命」が起きた時期をはっきりさせて、再び混乱が起きないようにして置くことにする。

「教皇革命」もマルクス主義者が話題にする様々な革命から影響を受けていたが、だからと言って「教皇革命」が経済的な理由で起きた訳ではない。どの革命も数世紀単位のタイムスパンで考える必要があるが、「教皇革命」の場合も「最後の審判」が強調され過ぎ、その反動で逆に他の側面が注目されるようになった。

最初の「教皇革命」(グレゴリウス改革)では精神的な側面が強調され、「第2の教皇革命」では現実的な側面が強調されたが、いずれも改革を目指していたことでは同じであった。新しい考え方を教皇令として公布したグレゴリウス7世は大声で命令し、巧みな外交を展開して見せたインノケンチウス3世は小声で呟くだけであったが、2人が目指していたことは同じであった。グレゴリウス改革によって教会は自由を手に入れたが、インノケンチウス3世と4世はイタリアに自由を獲得して見せた。このようにヨーロッパでは、人々の生き方を決める上で聖職者が果たす役割は大きい。近代のフランス革命とイギリス革命がフランス人とイギリス人を変えてしまったように、十字軍の時代に実行された「教皇革命」も「我らが姉妹たる母なる大地」を変えてしまったのである。革命は人間の情熱が生み出すもので、「教皇革命」もフランス革命やイギリス革命と同じように、大きな変革を実現していた。

ルイ・フィリップ Louis Philippe 内閣の「金持ちに成り給え Enrichissez-vous」と言うスローガン(このセリフは蔵相のギゾー François Guizot のもの)ですら穏やかに思えるほど「教皇革命」のスローガンは過激であった。まず1122-47年のグレゴリウス改革では、皇帝は教皇の家臣扱いであった。しかし教皇庁の相次ぐスキャンダルで教皇はローマから追放され、外国に亡命することに成ってしまった。1269-1302年の「第2の教皇革命」で皇帝派に勝利した教皇派は、油断していた。クレメンス4世の死後2年半もの間、枢機卿たちは後任の教皇を選ぼうとしなかったのである。教皇領の「回復」に70年も(1198-1268年)苦労したクレメンス4世に対する仕打ちが、これであった。イタリア人の怒りを恐れた教皇は聖務禁止を命じた都市を通過するとき、入城に際して禁止令を解き、出城に際して再度、禁止令を公布して行ったという噂が立ったほどであった。当時の教皇の尊大な態度をよく表しているのが、1302年にボニファキウス8世が公布した「唯一の聖なる Unam Sanctam」と題された教書であった。国王をはじめ世俗の君主が聖職者の尊大な態度を嫌悪していたとき、ボニファキウス8世は教皇が世俗君主を超える権威を持つことを強調して見せたのである。彼は自分の聖衣に、皇帝の紋章であった双頭の鷲を刺繍させていた。

教皇座の衰退は、このボニファキウス 8 世の尊大な内容の教書に始まると言ってもよい。フランスの騎士は教皇を捕らえて幽閉し、フランス国王は聖堂騎士団を異端裁判にかけて教皇の権威を失墜させた。聖墳墓と巡礼者を保護するために設立された聖堂騎士団は、教皇にとって十字軍運動を展開する上で欠かせない手段であった。それがフランス国王によって迫害され、最後には解散させられてしまったのである。皇帝から宗教的な権限を奪うことを目指していた最初の「教皇革命」（グレゴリウス改革）は、イタリアやフランスが神聖ローマ帝国の周辺で教皇を支持してくれていたからこそ可能であった。またそれが理由で聖堂騎士団は、フランスで問題視されることに成ったのである。1314 年に聖堂騎士団の総長は「火あぶりの刑 *autodafé*」に処せられた（18）。教皇を皇帝の支配から解放してくれた十字軍の騎士たちは失われ、やっと「回復」したイタリアの教皇領も失ってしまった教皇は、フランスのアビニオン Avignon に移されることになった。

「帝国の庭 *il giardino dell'impero*」であったイタリアは、都市の自由を実現してくれた教皇と 70 年間、無縁であった。このアビニオンでの「バビロン捕囚」は 1309 年から 1377 年まで続いたが、それは教皇の権威が絶頂期にあった時期（1200－1269 年）と同じ 70 年間であった。最初の教皇革命であったグレゴリウス改革は、絶頂期も衰退期も 50 年しか続いていない。

|     | 最初の「教皇革命」（グレゴリウス改革） | 「第 2 の教皇革命」 |
|-----|---------------------|-------------|
| 開始  | 1046 年              | 1161 年      |
| 絶頂期 | 1075－1122 年         | 1200－1269 年 |
| 衰退期 | 1147－1198 年         | 1309－1377 年 |

「第 2 の教皇革命」は衰退期で終わった訳ではなかった。15 世紀中頃に再びイタリアの都市と教皇庁は黄金期を迎えるからである。いわゆる「ルネサンス *Renaissance*」（再生）がそれであった。

ドイツ人も三十年戦争後に衰退期を経験したあと、同じように平和と繁栄を経験している（1763－1805 年）。この時期はドイツの古典芸術が栄えた時期で、ゲーテ・モーツァルト・ベートーベン・シラー・クロップシュトック *Friedrich Gottlieb Klopstock*・レッシング・ヘルダー・カントが活躍していた。イタリアの古典芸術でもダビンチ・ラファエロ・ロレンツォ（ド・メディチ）・ミケランジェロが活躍し、教皇庁ではバチカン図書館とシスチナ合唱隊が黄金期を迎えていた。さらに教皇は、新大陸アメリカで争っていたスペインとポルトガルの仲介役を務めていた。

イギリスの場合も、穀物法（1846 年）からボーア戦争（1900 年）までのビクトリア朝時代に、似たような繁栄期を経験している。またドイツの古典芸術が栄えた時代はナポレオン戦争に敗北して終わりを迎え（1806 年）、イタリアの古典芸術の繁栄期もフランスの侵略で終わりを迎えている。

|     | イタリア        | ドイツ         | イギリス           |
|-----|-------------|-------------|----------------|
| 絶頂期 | 1075－1122 年 | 1200－1269 年 | 1517－1555 年    |
| 衰退期 | 1147－1198 年 | 1309－1377 年 | 1618－1648(54)年 |
| 黄金期 | 1450－1498 年 | 1763－1805 年 | 1846－1900 年    |

イタリアの「ルネサンス」は、1453 年の第 4 回十字軍によるコンスタンチノーブル攻略でイタリアが得た富とは無関係であった。「ルネサンス」は 5 世紀に渡る努力の結果、得られたものなのである。その時に活躍した画家・建築家・詩人たちは、グレゴリウス 7 世とアッシジのフランチェスコが感じたものを古典芸術の形にしたのである。ラファエルの聖母画に描かれた背景画や、ミケランジェロの「最

後の審判（シスチナ礼拝堂）」に描かれた背景画は、かつて存在した信仰心の「ルネサンス」的な表現であった。我々は「ルネサンス」時代を美化しがちだが、「ルネサンス」が日没時の太陽の「最後の輝き」であったことを忘れてはいけない。「15世紀 **Quattrocento**」の芸術家たちが口にしたのは「最後の言葉」であった。彼らは壊したのであって創ったのではなかった。ちょうどゲーテがドイツの宗教改革を世俗化した形で表現して見せたように、彼らはスコラ学の伝統を世俗化して見せたのである。「第2の教皇革命」は、「ルネサンス」芸術の形で初めて現代のヨーロッパ人に受け入れられたのである。

イタリアが人類に大きく貢献したことは事実である。しかし、15世紀の50年間（1450-98年）がその全てであった。その後400年の間、イタリアはヨーロッパ人とアメリカ人を魅了し続けてきたが、それはヨーロッパとアメリカの旅行者の聖地でしかなかった。

しかし「教皇革命」には別の側面があった。イタリア以外のヨーロッパにとって、「ルネサンス」の時期は決して黄金期などではなかった。イタリアにとって良き時代は、他のヨーロッパ諸国にとっては悪夢の時代であった。イタリア以外の国にとって、15世紀は不幸で暗くて残酷な時代であった。ボルジア **Borgia** 一族に代表されるようなイタリアの支配者の悪政とヨーロッパ諸国の苦難が、「ルネサンス」の芸術と文学に暗い影を落している。15世紀は腐敗と幻滅と反動の世紀であった。15世紀は現在の問題を解決する上で参考になるかもしれない。15世紀は、多くの問題に直面し解決策を見出せないでいる現在の先駆者とも言える。

ここで比較のために教会の変化について考えて見ることにする。教会は世界に影響を及ぼして来たり、全ての信者を苦しめて来たからである。

「アビニヨンの捕囚」が終わった直後に起きた「教会大分裂 **Schism**」（1378年にローマで選ばれたイタリア人の教皇をフランス人枢機卿が認めず、彼らはフランス人の教皇を選出してアビニヨンに教皇座を復活させた）で教会は、その貴族政的な支配体制が批判に晒されることになった。枢機卿たちが教皇を選出することなしに何年も教会を支配し続け、聖堂参事会と修道会総会が司教と修道士を支配していたからである。托鉢修道士たちは、このような貴族政的な支配体制を嫌悪し批判していた。彼らは一致団結して貴族政的な支配体制を変えることにした。フランチェスコ修道会の急進派（「聖霊派」）は神学者と協力することにしたが、そのとき教皇が2人あるいは3人、並立ないしは鼎立して教皇の地位を争っていた。カトリック教会の「インテリゲンチヤ」（ロシアの知識人）とでも呼ぶべきパリ大学の神学教授と神学博士たちは、世俗の君主から支持を得ていた。もし1377年から1460年（この年に教皇ピウス2世は、教皇の並立ないしは鼎立状態を解決するために登場してきた「公会議の決定が教皇の権威に勝る」とする考え方を非とする教書を公布した）の間に、神学者が教会の支持基盤を広げて教会を民主化する努力をしていかなかったら、教会は世俗君主の愛想尽かし・嫌悪・反感に直面していたはずである。ジャン・ジェルソン **Jean Gerson** やニコラウス・クザヌス **Nicolaus Cusanus** にとって、教会制度の民主化は当然のことであった。それは教会の権威をヨーロッパで維持していくために欠かせないことであった。1075年のグレゴリウス改革で聖ペテロ（つまりその権威を継いだとされる教皇）は、聖パウロの権威を借りることで普遍性を獲得し、そのお陰で教皇による中央集権制によって皇帝から宗教的な権威を奪うことができた。1200年以降、ヨアキムのフィオーレ **Joachim of Fiore** から影響を受けたフランチェスコ修道会の「聖霊派」は、再び聖ペテロ（教皇）の権威を復活させることに貢献した。さらにその150年後、今度は世俗の君主が聖ペテロ（教皇）の権威を守るようになった。1378-1449年は世俗君主が聖ペテロ（教皇）の権威を守った時代であった。1409年のピサ公会議、1414-18年のコンスタンツ公会議、1431-49年のバーゼル公会議がそれである。公会議に代表を送っていたのはフランスのパリ大学、ドイツの6領邦国家、さらにスペインとイギリスであった。教会全体を代表する「議会

parliament」とも言うべき公会議は、すでに30年も前から計画されており、開催が実現したときの期待は大きかった。しかし各国を代表する誇り高き神学博士たちは、異端の疑いを掛けられることを教皇や枢機卿以上に恐れ、正統派として評価されるよう注意深く行動した。そして、それが失敗の原因となった。慎重すぎた彼らは、フス派に対する戦争を引き起こしてしまったのである。

若かった彼らは教皇至上派に対抗すべく、1415年にコンスタンツ公会議でフス Jan Hus を裁判に懸けることに同意してしまった。また改革への熱意に凝り固まった彼らは、その経験不足ゆえにフス派の反乱を抑えることができなかった。民主的な勢力の例に漏れず、彼らも外交が苦手だったのである。彼らが闘う相手は「ローマ人の王 rex Romanorum」(プファルツ侯ルンプレヒト Ruprecht von der Pfalz) のはずだったが、実際には教皇と闘うことに成ってしまった。5年に1度、開催されることになっていた「全体公会議 universal councils」は教皇の認可が必要であったが、当時の交通事情を考えるとヨーロッパは広大に過ぎた。その広さゆえに民主主義体制が機能するのは不可能であった。公会議派の勝利と言えたのは、1432年のバーゼル公会議における公会議優位の承認だけであった。そのとき5つの「民族集団 natio」(イギリス人・フランス人・イタリア人・スペイン人・ドイツ人：ただしドイツ人には、ポーランド人・ハンガリー人・デンマーク人・スカンジナビア人も含まれていた) が登場している。宗教改革はカトリック教会の外でウイクリフ John Wycliff やフスらによって開始される100年も前に、既に教会の内部で公会議派によって開始されていたのである。

フス派は教会の存在そのものを否定していたため、公会議派はフス派に対して何もできなかった。フス派は、いわば当時の「無政府主義者 Nihilist」であった。「無政府主義者」は、いかなる形態であれ政府の存続に反対していたが、フス派もいかなる形であれ教会の存在を認めていなかったのである。

しかも5つの「民族集団」は統一戦線を組むことができなかった。教皇は個別に「民族集団」と妥協することで、彼らに対抗することができたのである。1449年にローザンヌに残っていた最後の公会議派は、教皇の公会議優位論の形式的な承認を受けて解散し、教皇はローマに戻って教皇庁の再建に乗り出すのである。

この状況に満足していたのはイタリア人だけであった。世俗君主たちは何事も解決できなかった聖職者を軽蔑するようになり、民主主義は今日(この本の初版は1938年：訳者)と同様に信頼を失っていた。教会法学者は低俗な政治家に過ぎず、教皇は偽書の「コンスタンチヌスの寄進状 Donatio Constantini」(初めてキリスト教を公認したコンスタンチヌス大帝が教皇に聖俗の支配権を与えたときされていた)を振りかざし、修道士や司祭たちは放蕩を重ね、教会法学者や神学博士たちは収賄に耽る様に成っていたのである。

そこで登場して来たのが、聖人でもあり政治的な指導者でもある新しい種類の人間であった。問題解決能力を持った統治体が不在であったことから、ジャンヌダルク・サボナローラ・スイスの守護聖人ニコラウス=フォン=フリューエ Nikolaus von Flüe が登場して来たのである。聖人と政治家を兼ね備えていた彼らは、かつて存在した教会組織と、新しく登場して来ることになる近代的な統治体の橋渡しする役割を担っていた。15世紀は無数の難題が登場してきた世紀であった。

ヒトラーも15世紀的な意味で聖人と政治家を兼ね備えた人物であった。ヒトラーは対トルコ十字軍を呼び掛けた反ユダヤ主義者ジョバンニ・カピストラノ Giovanni Capistrano とよく似ている。のちに「ヨーロッパの使徒 apostolus Europae」として列聖されるカピストラノには、1445-55年に熱狂的な支持者が数多く存在していた。カピストラノはフス派と戦い、ヒトラーは共産主義者と戦った。カピストラノはIHS(イエスを意味する)という文字の背景に太陽をあしらったシンボルを使用した。ヒトラーは鍵十字をシンボルとして使用した。カピストラノは教皇による独裁体制を擁護するこ

とで宗教改革を 50 年も遅らせたのである。公会議派の民主主義に幻滅し、フス派の「ボルシェビキたち」に懲りたヨーロッパ人は、カピストラーノが行なうイタリア語の演説に魅せられていた。一言も意味が判らない演説を何時間も注意深く聞いていた聴衆は、通訳が現地語に訳し始めるとすぐにその場を去って行った。カピストラーノは公会議派の神学博士を軽蔑し、ユダヤ人を焼き殺し、トルコ人やフス派を攻撃し、古典古代の研究者や世俗君主を脅迫していた。彼は 1450 - 1517 年の不寛容な教皇体制の復活を目指していたのである。

古い教皇体制も、それなりに立派であった。問題は、その構成員も支持者も立派さを信じていなかったことである。例えば後にピウス 2 世として教皇位に就くアエネアス＝シルビオ＝ピッコローミニ Aeneas Sylvio Piccolomini の名前の由来である。ウエルギリウス Vergilius は『アエネーイス（アエネアスの歌）』のなかでトロイアの王子のことを「ピウス＝アエネアス（忠実なアエネアス）」と呼んでいたが、ピウス 2 世の「ピウス」も、このウエルギリウスの言葉に由来する。教皇の名前に異教的な古典古代の英雄が登場することに、教皇庁の退廃ぶりが伺える。衰退期の制度は野蛮な形でしか再建できず、その制度がもともと持っていた繊細さや上品さは失われてしまうものである。1460 年のピウス 2 世の教皇庁は、グレゴリウス 7 世・インノケンチウス 3 世・ボニファチウス 8 世の時代に比べて残酷で野蛮であった。この教皇によるあからさまな独裁体制は嫌悪され、信用されず、反感と軽蔑の対象でしかなかった。

いわゆる「ルネサンス（再生）」の時代は遅れてやって来た暗黒時代であった。1460－1517 年は、ヨーロッパが中世の遺物によって苦しめられた時代であった。当時のボルシェビキ党とも言うべきフス派は目に見える教会を排除しながら、それに代わるものを提供できないでいた。ただ壊すことしかしないフス派に絶望したヨーロッパ人は、時代遅れの古い教会を受け入れるしか無かったのである。その最たるものが、当時のファシストとも言うべきカピストラーノたちが推し進めていた教皇の独裁体制であった。1460 年にピウス 2 世は有名な教書「忌むべきこと Execrabilis」を公布して、何事であれ何者であれ公会議に提訴することは「忌むべきこと」として禁じたが、そこで使われている激しい言葉は、丸で現在の独裁者を思わせるものである。1075 年のグレゴリウス 7 世の「教皇令 Dictatus Papae」に始まり、インノケンチウス 3 世が 1200 年に招集した枢機卿会議、さらに 1377－1449 年の公会議派の隆盛を経て、1460 年のピウス 2 世の教書の公布に至る経緯は、ポリビオスの政体循環論で説明できる。

|                          |             |
|--------------------------|-------------|
| カトリック教会の「王政 Monarchy」・・・ | 1075－1200 年 |
| 「貴族政 Aristocracy」・・・     | 1200－1377 年 |
| 「民主政 Democracy」・・・       | 1377－1460 年 |
| 「独裁政 Dictatorship」・・・    | 1460－1517 年 |

こうした政体の循環があっても、カトリック教会の基本的な在り方が変わることは無かった。たとえば 1075 年のグレゴリウス改革では、教皇は修道士や司祭たちの「受託者 trustee」となり、皇帝が教会内で有していた権限を排除して、教皇だけが聖ペテロの権限の後継者でありキリストの代理人であるとされるように成ったが、それは教会の在り方を変えるためでは無かった。部族民を十把一絡げで改宗させるやり方を改め、個人を一人ひとり改宗させることで教会を内部から改革して行くためであった。しかし、それには政治的な手段が必要であった。

古い教会が大切にしていた神秘的な内実を目に見えるようにするためには、教会統治の方法を世俗的で中央集権化されたものにする必要があった。それを実現したのが、1075－1517 年に登場してきた教

会法である。それは「人間の法であり自然法 human and natural law」であった。千年間続いてきた「神の法 Ius Divinum」が変わることは無かったが、新たに登場してきた教会法は、政治の世界に適用が可能な合理的なものであった。

神秘性を排除した「目に見える教会 visible Church」は、時間を超越した信仰や聖なる存在とは無縁であった。それは世俗世界に属し、世俗世界のルールに従う「政体 body politic」の一種であった。「政体」の一種であるからには、ポリビオスの政体循環論で説明できるのは当然である。同じカトリック教会であっても、1110年のそれは王政的であり、1300年のそれは貴族政的、1430年のそれは民主政的で、1460年のそれは独裁政的であった。

興味を引くのは政体循環が起きるとき、変化した部分と変化しなかった部分の割合がどうなるかと言うことである。ポリビオスの政体循環論を支持する者としては、この割合がどんなものであったかをぜひ解明したいところだが、さしあたり指摘して置きたいことは、ヨーロッパの歴史において政体循環が確認できるのが1075-1517年のカトリック教会と1517年から現在までの国民国家の2例だけだと言うことである。いずれの場合も変化は根本的なものであった。十字軍時代のカトリック教会も近代の国民国家も、古代からの思考様式では解決不可能な深刻な事態を切り抜けるのに成功していた。カトリック教会の場合、その基本的な部分については継続性が確認できるが、政体は大きく変化している。王政・貴族政・民主政・独裁政のいずれも永久には存続できない。いずれ他の政体にとって代わられる運命にあるし、その順番もポリビオスが指摘している通りである。何が変わり何が変わらなかったかを以下で確認してみよう。

|                 | 教会組織       | 国民国家       |
|-----------------|------------|------------|
| 王政的な側面が強調された時期  | 1075-1200年 | 1517-1648年 |
| 貴族政的な側面が強調された時期 | 1200-1377年 | 1640-1789年 |
| 民主政的な側面が強調された時期 | 1377-1460年 | 1789-1917年 |
| 独裁政的な側面が強調された時期 | 1460-1517年 | 1917- ?    |

ヨーロッパには、教会と国家が本性として根付いている。そこで教会と国家が自らの存続のために戦ってきた歴史を振り返ることには、何の問題もない。例えば1929年に教皇は、教皇領を復興することを諦めて「第2の教皇革命」を思い出させる「バチカン市国 Città del Vaticano」で我慢することにしたが、これなどは新時代の始まりに過去が再登場することを証明する良い例である。しかしヨーロッパには、教会と国家以外にもこのことを証明する事例が存在するはずである。

「一体化した世界経済体制 an economic organization of the world」の登場には、まだまだ時間が掛かりそうである。教会と国家の政体循環論から、国民国家を単位とする経済体制が「一体化した世界経済体制」に移行するのが簡単でないことは判る。教会がフス派と公会議派の登場に直面していたとき、ドイツ・フランス・スペイン・イギリスなどの国民国家には、フス派や公会議派を支持する聖職者が数多く存在していた。しかし彼ら聖職者は、その優れた知恵にも関わらず近代的な世俗国家を創りあげることができなかった。聖職者ゆえの限界がそれを邪魔していたのである。司教たちも神学者たちも、自らの存在を否定することができなかったのである。なぜなら、近代的な世俗国家に聖職者が関与する余地は無かったからであった。

第一次世界大戦後の政治家たちも、国民国家では戦後の経済復興を実現することは不可能であることを良く知っていた。国民国家の利害が世界経済体制の構築を妨害していることを彼らは良く知っていた

が、政治家は自国民を無視することができなかつた。無私無欲で正直な愛国者であればあるほど、自分の知恵を生かすことができなかつたのである。マクドナルド Ramsay MacDonald・ブリアン Aristide Briand・ウイルソン Woodrow Wilson たちは、それが自分の理想と如何に矛盾していたにしても、まずイギリス人・フランス人・アメリカ人の政治家でなければならなかつた。ムッソリーニ・ヒトラー・デバレラ Eamon De Valera (アイルランドの独立運動家) たちは、自分たちが国民国家の政治家であることを当り前だと考えていたが、それは間違っている。もはや国民国家は存在理由を失いつつある。新しい考え方が登場して来れば、それに取って代わられる運命にある。

1460年に聖職者に代わりうる世俗の役人は存在しなかつたし、1938年にも政治家に代わりうる経済問題担当の役人は存在しなかつた。銀行家もボルシェビキ党も労働組合も、問題解決能力は有していなかつた。「一体化した世界経済体制」を構築できるような専門家を養成するには、少なくともあと50年は必要であろう。専門家養成の大変さに政治家は直面することになる。独裁者は、そんな政治家の試みを妨害するはずである。それに孤立主義を唱える民主主義国の政治家も、おなじく妨害を試みるはずである。危機と対立を経験して、懐疑的でシニシズムが蔓延するようになった戦後世界では、純真さとか真面目さなどは問題解決のために何の役にも立たない。

危機と対立の原因となるファシズム・共産主義・古典古代崇拜・反ユダヤ主義などに耐性ある者だけが解決策を見出すことができるが、過去に目を向けてみると希望が無いわけではない。

現在の経験しているような経済危機は、すでに15世紀に経験済みであつた。1400年以降、イタリアの都市国家は成長を止めていた。当時の都市国家の経済状況は現在の国民国家の経済状況と似ている。当時はヨーロッパ全体が絶望とシニシズムに苦しんでいた。反ユダヤ主義が蔓延していたが、希望が無いわけでは無かつた。その後の400-500年で政体は交代し、新しい道が開かれたのである。それを実現したのは、シニシズムに塗れた「ルネサンス」の古典古代研究者たちではなかつた。彼らは何も信じず、いかなる形の信仰も軽蔑していた。人間存在を肯定し、新しい信仰の道を見出した勇敢な者たちだけが解決策を見出すことができた。